

編集後記

＜竹本 忠良＞

本号の編集方針は市川平三郎博士らの巻頭の論文がそのすべてを正確に示している。胃潰瘍の良性悪性の鑑別診断というテーマは日常もっとも重要で、毎日身をくだいて苦勞しているわけであるが、内科診断学なみの鑑別診断学のレベルをはるかにこえ、しかも将来の問題点を鋭く、かつ豊かに示した諸論文を得たことは、「胃と腸」が依然若さを保ち健在であることを物語っているものといえよう。

市川博士が鑑別上の5段階を提唱されたことは、なお進歩が続けている早期胃癌診断学が日常当面する混乱を指摘し、整理されたものであって、この分類法は必ず普及し愛用されるに違いないであろう。病理、X線、内視鏡それぞれの立場から力作がよせられた。大岩博士の研究論文も大学病院ではむづかしい領域のお仕事だけに、たいへん興味深い。その他、症例はいつどの号を読んでもつねに新鮮であることに本誌の真価がある。

じつは本号の「編集後記」はゲラ刷をもってきて札幌のホテルで書くはめになった。夏休みを北海道でというシャレた話ではなくて、胃潰瘍の局注について直接御本尊の並木先生の教えをうけるためである。潰瘍の局注療法も次第に普及してきたが、まず潰瘍の良・悪性の鑑別診断を市川の第4段階まではきちんとする必要があることはいうまでもないが、この基本をまもり、優秀な治療成績をあげるためにいかに努力していただけるか実際に見学して敬服した次第である。鵜のまねをすることはいつの時代でもたいへんむづかしいことであるが、それを正確に認識できることが勉強の第一歩であるようにいつも思っている。

＜編集＞ 早期胃癌研究会